発行日　2012 年 10 月 20 日（隔月 20 日発行）　通巻 298 号

日本国際ボランティアセンター　会報誌
トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

Trial & Error

No.298
November-December 2012

特集

「アラブの春」から改めて中東を考える

（2012 年 6 月、エジプト大統領選挙の後、カイロのタハリール広場に集まったムルシ候補を支持するムスリム同胞団のデモ隊＝撮影・川上泰徳）

JVC Japan International Volunteer Center

特集

「アラブの春」から改めて中東を考える

「アラブの春」と呼ばれる中東における一連の動乱は、いまも地域の政治状況や人びとの暮らしを揺り動かしている。歴史的経緯や各国の思惑が複雑に交錯する中東に関して、その問題すべてを一度に正確に理解することは難しい。しかし、多くの人びとを突き動かしたこのような事態を前にして私たちにできることは、少なくとも「その問題を理解 / 共感しようとする姿勢」をとり続けることだろう。今回は、中東駐在経験の長い新聞記者の川上泰徳氏に「アラブの春」の動きを改めて俯瞰していただくことで、中東で起こっている動きを捉えるための材料を提供したい。（編集部）

（エジプトで 2011 年 2 月 11 日にカイロのタハリール広場にあつまり、ムバラク大統領の辞任を求める群衆。この日の夕方、大統領は辞任を発表した＝撮影・川上泰徳）

第一部 三つのなぜで読み解く「アラブの春」

JVC代表谷山（以下谷山）・今回は朝日新聞の川上泰徳さんにお越しいただきました。川上さんは長年中東各地に駐在され、今回の「アラブの春」の一連の動きを現地で取材されていました。まず最初に、少し大局的な視点からいまこの中東・アラブで起きている変動について三つの「なぜ」をあげてお話をうかがいます。

なぜ①・今回の変動はなぜ二〇一一年の初めなのか？

朝日新聞川上氏（以下川上）・大きく言うと、九〇年代があり、九・一一があり、その後のイラク戦争、という流れです。

九〇年代は、イスラム武装闘争とそれに対する強権的な弾圧が出てきた時代なんです。九一年に湾岸戦争[※注①]があって、アメリカが湾岸に軍事的プレゼンスを示すなかで、アラブ諸国家は反米／親米と分裂したわけですね。その後、親米国家では反米の武装闘争が起きた。アルジェリアやエジプトがそうです。サウジアラビアでも、体制の主流（スンニ派の宗教者）の中から反対運動が起きました。しかし九〇年代半ばに、政府がそれらを弾圧して抑え込みます。同時に、アメリカもアラブの反米諸国に圧力をかけました。スーダン、リビア、シリアがそうでした。

九〇年代後半になると、政治的な批判をする穏健派と言われるイスラム勢力も政治的に排除されていきます。政権側が過激派も穏健派も抑えこむ、政治的な無風状態が生まれていたわけです。それが、二〇〇〇年のインティファーダ[※注②]、〇一年の九・一一[※注③]という形で吹き出したわけです。それを受けたアメリカは、アフガニスタン空爆、そしてイラク戦争へと進んでいくわけですよね。

そうしたなかで、イラク戦争の後にブッシュ大統領は「中東拡大構想」を提唱しました。これは、要は「中東の皆さんも民主化しなさいよ」という意味です。政権に対する批判をまったく受けつけないアラブの強権体制のもとで居場所がなくなっていた過激派は、より軍事的に狙いやすい欧米をテロのターゲットにする。それが九・一一事件です。中東の強権体制の矛盾が欧米にあふれないようにするためには、ムスリム同胞団のような武力闘争しない勢力は少なくとも選挙に参加させなさい、と。武力闘争している相手にもちゃんと裁判などをして対応しなさい、ということ。それが「民主化する」ということなんですね。

エジプトの〇五年の議会選挙では、ムスリム同胞団がそう名乗り出て出馬し、「イスラムは解決策である」というスローガンまで出しています。それを見た時に私は「いったい何が起こったのだろう」と信じられない思いでした。それまで、同胞団は名前も出せなかったのですから。それは、アメリカのこうした民主化の圧力のもとでの選挙だったからなんですね。その結果、十五議席だった同胞団は八十八議席を取りました。同じことはパレスチナのハマスにも言えて、〇六年一月のパレスチナ評議会選挙にハマスが参加します。イスラエルは嫌がったけれど、結局アメリカはハマスの参加を求めた、ということです。

ところが、こうした方針は、ハマスが選挙に勝って議席の過半数を取ってしまったことで転換します。ハマスが主導する政権は認められないということで、逆に支援を打ち切られ、制

※注①　湾岸戦争 :1990 年 8 月、イラクがクウェートに侵攻したことに対して、国連決議をもとにアメリカ軍を中心とする多国籍軍が構成され、翌 91 年 1 月にイラクへの空爆を開始。4 月に停戦。
※注②　2000 年のインティファーダ：2000 年 9 月 28 日、イスラエルのシャロン外相（当時）が武装した側近とともにアルアクサ・モスクに入ったことに反発して巻き起こったパレスチナ人による抵抗運動。

川上泰徳（かわかみ・やすのり）

朝日新聞国際報道部・機動特派員。長崎県生まれ。中東アフリカ総局員（カイロ）、エルサレム支局長を経て、中東アフリカ総局長兼バグダッド支局長。編集委員、論説委員を経て、2012年4月より現職。著書に『イラク零年』（朝日新聞社）、『現地発　エジプト革命』（岩波書店）、『イスラムを生きる人びと』（岩波書店）。パレスチナ報道で、2002年度ボーン・上田記念国際記者賞。

■「なぜ①」の流れを図示すると：

1991年：湾岸戦争
→ 湾岸でのアメリカの影響力増加
↓
1990年代：
反米のイスラム武装闘争を強権的に抑圧
↓ **反発**
・2000年のインティファーダ
・2001年の9.11事件
↓
2003年：イラク戦争 →「対テロ戦争」拡大
↓
2000年代：
アメリカによる「中東民主化政策」の推進
↓ 途中で頓挫 →**反発**
2011年の「アラブの春」

裁下に置かれてしまいました。

もうひとつ、選挙は定期的に行なわれるわけですが、エジプトでは〇五年の次は二〇一〇年十一月の議会選挙がそれにあたります。このときはもうアメリカはオバマ大統領になっていたわけですが、彼は「イスラムとの対話」とは言うが、「中東の民主化」とはまったく言わない。その結果、同胞団の議席はゼロになりました。これはひどい話で、九〇年代にさえなかったような政府による激しい選挙妨害があって、実質的に選挙から排除されたのです。

私は「対テロ戦争」の延長で米国が中東の民主化を求めたことは合理的な戦術だったと思いますが、結局、無責任にも途中で投げ出してしまった。中東の民主化としては後退してしまったわけです。それが二〇一〇年末です。言ってみれば、この段階でアラブの民主化は完全に展望がなくなってしまった。

九〇年代の抑圧に対する反動がインティファーダや九・一一であれば、今度はアメリカの「中東民主化政策」の挫折・失敗に対する反発が、二〇一一年の「アラブの春」につながっていったのではないか、と思っています。

なぜ②・なぜチュニジア・エジプトで起こったのか？

谷山・今回のような動きはなぜチュニジアやエジプトで大きく広がったと見ていますか？

川上・今回の「アラブの春」に参加した人たちは、既存の政党による動員などではなく、それまで政治に参加していなかった人たちと言っていいと思います。政治に参加していた人たちは、九〇年代の弾圧の時代を経てどんどん少なくなっていきました。唯一の批判勢力はイスラム勢力でしたが、政治よりも社会運動が中心でした。かと言って左派や民族主義も政治的影響力は無い。民衆は、政治勢力に対する期待を無くしていたわけです。そこで、政治勢力ではない若者たちがデモを起こした、という見方です。

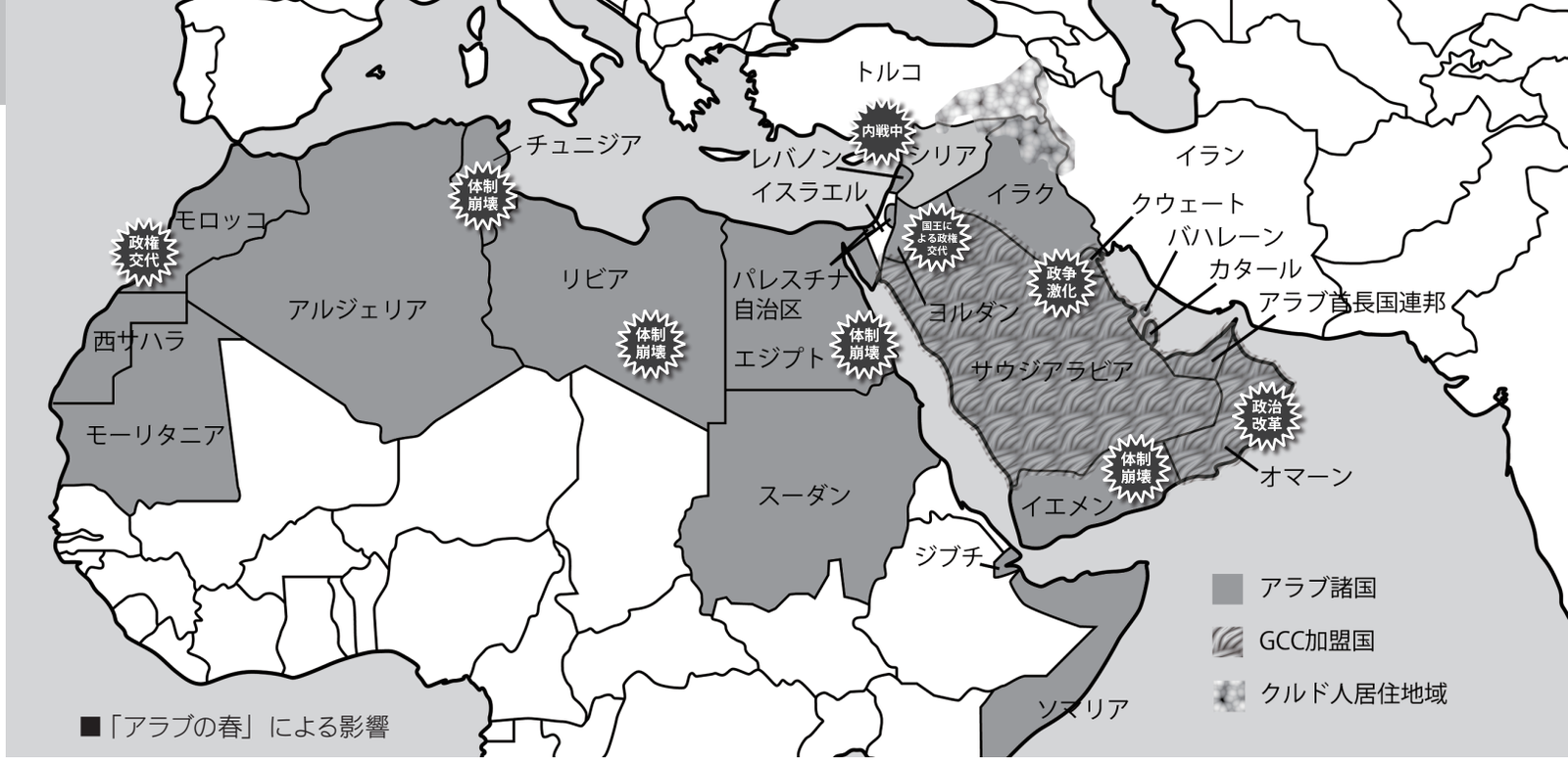
アラブ世界というのはだいたい平均年齢が二十代で、若者が人口の半分以上を占めている。その層が結婚もできなければ住宅も持てない、就職もできないという社会問題のしわ寄せを受けているわけです。この人たちは、携帯電話を使い、インターネットを通じて世界のこともわかるし、メールなどでだれとでもコミュニケーションできるような環境にもあります。

すると、少しずつ勝ち組と負け組がはっきりしてくるのです。世界とつながって、高給をとったり、ビジネスをしたりすることがだんだんできてくる。ところが、本当に大きなビジネスをやろうとすれば、政権や権力者にコネでつながらざるを得ない。チュニジアのベン・アリー政権は二十三年、エジプトのムバラク政権も約三十年続いてきたわけですから、そうした社会では、結局は権力者とつながらなければ何の許可もおりないし会社を起こすこともできない。それがわかってきたんです。

強権政府の下では集会やデモは禁じられています。それだけでなく、職場や大学、モスク、喫茶店など、どこでも私服の公安警察や通報者が目を光らせている。九〇年代に強権的傾向が強まるなかで、若者たちの政治離れが起こります。一方で、九〇年代後半には携帯電話やインターネットが広がり、政治から離れた若者たちのコミュニケーションの場になっていくわけです。

特にチュニジアは、インターネットを使うような中産階級＝ミドルクラスがけっこういたということですね。エジプトだっ

※注③　9.11事件：アメリカ同時多発テロ事件。2001年9月11日に、飛行機が4機同時にハイジャックされ、ニューヨークの世界貿易センタービルとワシントンの国防総省に激突したとされる事件。サウジアラビア人のオサマ・ビンラディンをリーダーとするテロ組織「アルカイダ」による犯行とされた。



■「アラブの春」による影響

【今回の座談会で言及された国々】

	チュニジア	リビア	エジプト	イスラエル	パレスチナ自治区	ヨルダン	シリア	トルコ	イラク	イラン	サウジアラビア
主な宗教 ※( )内は少数派	イスラム教スンニ派多数	イスラム教スンニ派多数	イスラム教スンニ派多数（キリスト教系コプト教）	ユダヤ教多数（イスラム教、キリスト教）	イスラム教スンニ派多数（キリスト教）	イスラム教スンニ派多数（キリスト教）	イスラム教スンニ派多数（キリスト教、ユダヤ教） ※現政権はアラウィー派中心	イスラム教スンニ派多数（キリスト教）	イスラム教シーア派６割（※現政権もシーア派）、スンニ派3割（キリスト教）	イスラム教シーア派多数（キリスト教）	イスラム教スンニ派多数
「アラブの春」前後の主な政治的影響	体制崩壊	体制崩壊	体制崩壊			国王による政権交代	内戦中				
アラブ諸国 （アラブ連盟）	◎	◎	◎		◎	◎	（現在は加盟資格停止中）		◎		◎

←→（クルド人居住地域あり）

て四割くらいは「すごく貧しくはないが貧しい」ミドルクラスなのではないでしょうか。カフェなんかに集まっている若者たちを見ていると、明らかにミドルクラスです。世界のことも知っているし社会のこともわかるけれども、自分たち自身には展望がない人たち。結婚もできないし就職もできない、実質的に何ら恩恵を受けていない。そういう人たちの革命ですよね。だから、「中産階層革命」、「ミドルクラス革命」と言ってもいいのではないでしょうか。

なぜ③・なぜ平和的なデモによる民衆運動が、リビアやシリアでは武装闘争になったのか？

谷山・これまでのお話で、エジプトやチュニジアにおいては、ある程度の格差のなかで力を持っているが自由な機会がないことで不満を持つ層が厚かった。と同時に、既存の政治勢力は弾圧によって民主化の反動で抑え込まれていた。だから今回の運動の中心になったのは民衆＝若者だった、という流れがよくわかりました。逆にリビアやシリアはどうなんですか？

川上・まずはリビアですね。ここはカダフィ大佐による独裁体制が四十年以上続いていました。そして、リビアの国民は「チュニジアが倒れた、エジプトが倒れた、次は自分たちだ」と思っていたわけです。リビアではみんながカダフィ体制を「こんなバカな体制はないだろう」と思っていたわけです。憲法も議会もないし、産油国なのに国民は貧しいままだし、グリーンブック※注④みたいなことを学校で教えている。要するにまったく意味がないとみんな思っていたわけです。そして軍事衝突の結果、ＮＡＴＯの介入もあってカダフィ政権は倒れました。

次にシリアですが、バース党独裁政権で、アサド大統領による強権体制に対する反政府運動から発生した内戦状態が今も続いています。シリアという国はアラブ圏では文化国家で政治的な歴史もあるし、アラブの民族運動の歴史もある。政治的な成熟度が高いのです。そういう意味で、「アラブの春」に呼応して民主化運動を始めようという意識は、容易に醸成（じょうせい）されたと思います。

谷山・なぜリビアのケースのような外からの表立った軍事介入がないのですか？

川上・シリアはリビアとは異なり多民族、多宗教の国家ですか

※注④　グリーンブック：『緑の書』。カダフィ大佐が著した書物で、毛沢東語録やコーランに依拠してリビアの政治体制を記したもの。資本主義、民主主義を否定しており、これに基づいて実際に憲法・議会・政党などは廃止された。1975 年初版。

※今回の記事内で使用している固有名詞の表記は、日本国内で一般的に使用されているものを中心にしています。

ら、いまの体制を崩してしまうと、多くの難民が出たり、長期間の内戦が続いて大混乱になって、収拾がつかなくなることへの恐れがあると思います。シリアでは、アサド大統領の出自であるアラウィー派（シーア派少数派）を中心として、政権にスンニ派の協力者もあり、キリスト教徒にもクルド人からも協力を得る形で、アラウィー派主導のバース党体制という、ある意味宗派を超えた体制が作られています。

例えばリビアでは、首都トリポリを陥落させれば、それがイコールとしてカダフィ体制の終わりを意味していたわけです。カダフィには他に逃げ場がないので。しかしシリアの場合は、政権内である程度の勢力を持っている力が複数あってそれぞれが自分たちの勢力地域を持っているために、たとえ首都のダマスカスが陥落しても、それがイコール内戦の終わりにならないわけですね。アラウィー派も北のほうに拠点があり、キリスト教徒もいれば、クルド人も人口の一〇％くらいいるので、イラクのクルド勢力から支援を得て防衛体制に入るかもしれない。こう考えると、ダマスカスが陥落した後も内戦が続きかねない。

谷山・シリアに関する分析は、報道で見聞きすることとずいぶん違いますね。やっぱり一党独裁のバース党に対する民衆の反対運動から始まって、それが武装闘争に発展した、という見方が多いと思いますが。

川上・シリアの一番弱いところは、政治と軍事のプロセスが分裂していることです。シリア国民評議会という反体制側の政治団体の影響力が弱く、こことほとんど関連ない形で自由シリア軍がシリア軍と交戦している。民衆の平和的なデモもありましたが、これも自由シリア軍とは離れています。リビアはそうではなかった。リビアにもリビア国民評議会がありますが、ここは国際社会の支援や承認を得て、政治と軍事のプロセスを一体化させて内戦を闘うことができました。トリポリが陥落した後、このリビア国民評議会が政治的に主導権をもって選挙や暫定政府づくりを進めています。

シリアはまったく違います。自由シリア軍というのは一体なんなのかよくわからない。ところが、その自由シリア軍がアレッポでもダマスカスでも戦闘を続けている。どこかが自由シリア軍にお金と武器を渡しているのです。戦後、シリアに対して影響力を行使したいと考えているところでしょう。それはトルコであったりアメリカであったり湾岸諸国であったり、そうした欧米も含めた周辺国の利害がシリアに投影される形で、軍事的混乱が収まらないままでいるわけです。

谷山・支援するほうもぜんぜんシナリオを描けずに支援しているということですね。

川上・シナリオを描いていないのだと思います。政治的意思はすごく弱いままですから、分裂の可能性はリビアと違ってかなり高いと思います。

第二部 座談会・JVC活動地からの視点

■パレスチナから見ると

谷山・ここからは、JVCの現場との関連について考えてみましょう。まずは、お隣のエジプトは民主化したけれどもその影響を受けるような動きが、パレスチナで見られますか？

JVCパレスチナ前現地代表福田（以下福田）・エジプトの民衆を応援するデモはいくつかありました。パレスチナの人が言うには、エジプトの革命は、親米政権に対する民衆の不満が爆発したということでした。一方、パレスチナでは民主的に行なわれた選挙結果が覆されています。次のインティファーダが起こるとすれば、欧米に押し付けられた政権であり腐敗に満ちたファタハ政府に対するものという声もあります。

川上・ガザをハマスがおさえてからもう五年ですか、[※注⑤] 民衆のハマス支配に対する見方はかなり良くなっているんですか？

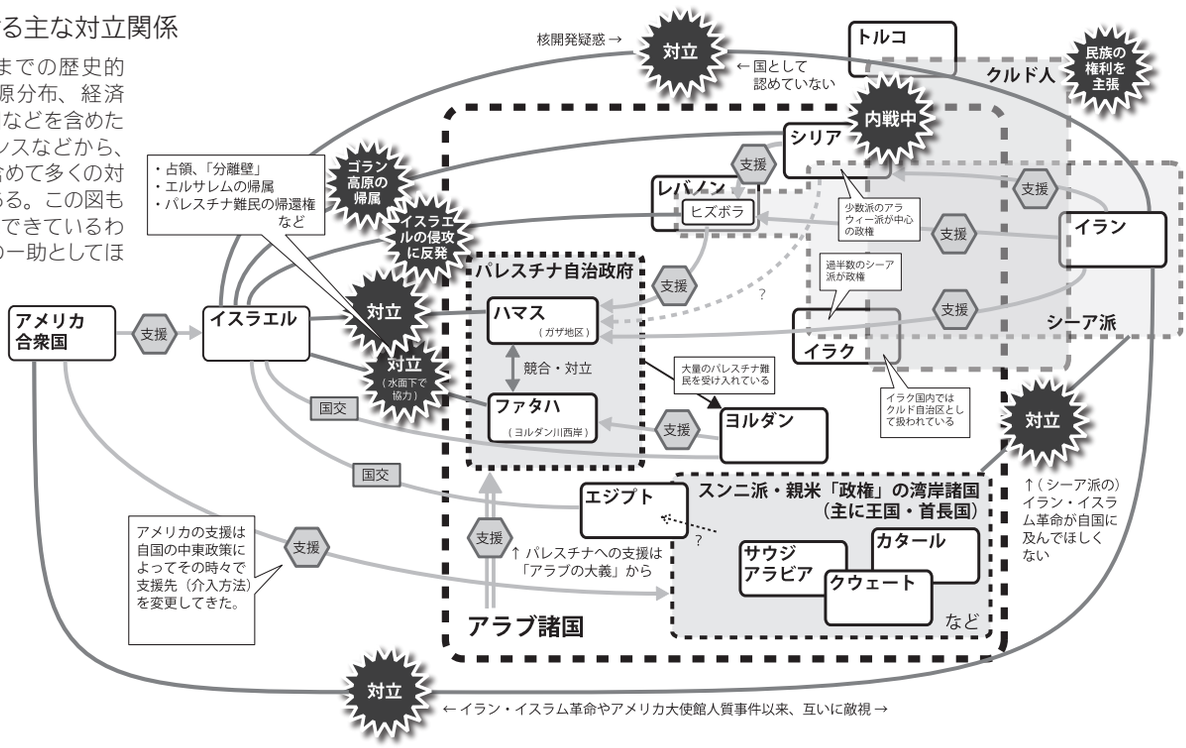
福田・ハマスは信頼されているように見えます。他に選択肢がファタハしかないならハマスだろう、ということかもしれませんが。また、エジプトの政変以前からですが、パレスチナの人たちが戦い方を変えているようにも見えます。以前は、検問所でイスラエル兵による嫌がらせに抵抗している光景をよく見たのですが、最近はひたすら耐えているようにも感じます。ハマスは最近、攻撃を抑えていて、武力闘争から政治闘争への変化と言うか、パレスチナ全体が耐えながらも戦い方を変えて来ているのではないか、と思えます。

川上・昨年以降の動きを見て

※注⑤　ハマスがガザをおさえた：2005年8月にイスラエルがガザ地区から撤退。翌06年1月の評議会選挙でハマスが第一党となったが、国際的には認められなかった。その後もイスラエルによる攻撃やファタハとの抗争を経て、07年6月11日にハマスは武力でガザ地区を占拠した。しかし、事実上いまもイスラエルに包囲・封鎖されている。

■中東地域における主な対立関係

この地域には、これまでの歴史的経緯や石油などの資源分布、経済格差、アメリカ合衆国などを含めた政治的なパワーバランスなどから、右に図示したものを含めて多くの対立関係や紛争問題がある。この図ももちろんすべてを表現できているわけではないが、理解の一助としてほしい。（編集部作成）



も、ファタハとの和解を進めるなど、おっしゃるようにハマスはかなり政治的な方向に転換してるのではないか、とも思えますね。今年の七月にチュニジアでアンナハダ（ムスリム同胞団が母体のイスラム政党）の総会があったのですが、そこにも、メシャール（ハマス政治局長）が主賓として招待されていました。

福田・ハニヤ（ハマス首相）もエジプト政変以降は、様々な国を訪問するようになりました。

川上・ハマスのトップが周辺国からVIPとして扱われている状況ですね。「アラブの春」以降、ガラッと空気が変わった。

谷山・それはアメリカの（介入の）空白ですか？

川上・それは違うと思います。たとえばエジプトでは、ムスリム同胞団が議会選挙で勝ち、大統領も出して、ある意味軍も抑え込んでいます。最近言われているのは、アメリカがそれを是認した、ということ。

それはなぜか？これは僕の意見ですが、この「アラブの春」は、経済的怒り、政治的怒りもありますが、もうひとつは「反米」の怒りですよね。アメリカのとって恐いのは、この「反米」が革命の後に噴出することですよ。アメリカにとっての最悪の事態は、イラン革命の後に起こったアメリカ大使館が占拠されたような事[※注⑥]が、エジプトでも起こること。そうしたらアメリカの中東政策は立ち行かなくなる。昨年夏にエジプトのイスラエル大使館で旗が燃やされたり包囲されたりした時に、ムスリム同胞団はメンバーに対して「行くな」と指示をしました。同胞団は政治的に大きな存在ですが、プラスして若者の怒りをコントロールしようともした。

福田・エジプトは革命後も、イスラエルとの和平合意にとても慎重ですね。どうしてですか？

川上・ムスリム同胞団というのはすごく現実的ですから。

JVCイラク事業原（以下原）・それは、長年弾圧されてきたことと、政権をとって現実主義的になったということですか？

川上・ムスリム同胞団はもともと武装闘争ではなく、政治闘争をやってきました。イスラム勢力というのは、基本的には保守勢力で、道徳や秩序が乱れるのがいや、という考えなんです。かつ、すごく現実的なので、イスラエルとの平和条約についても、基本的には嫌なわけだけれども、それを怒りにまかせて破棄したりはしないでしょう。

■いまだ国内の混乱が大きいイラク

谷山・イラクはどうですか？

原・イラク自体の状況に関して、知り合いのイラク人の意見を紹介します。ある程度教育も受けているし知恵もある人の言葉ですが、「現在のマリキ政権に不満はあって、当初はそれこそ『食べ物をよこせ』的な、電気も食料も無いことへの不満を噴出させる形でのデモはあるが、それ自体で政権を倒そうという意図はない。マリキ政権そのものがかなり不安定で、それを倒したところでろくなことにならない」ということでした。

イラク国内には中央政府周辺だけでなく、ムクタダ・サドルのシーア派組織や他にもクルド人やスンニ派党派もあって、いまだ混沌とした状態が続いています。ですので、この時期のデモも「アラブの春」の影響だけではない、と見ています。

谷山・デモはどれくらいの規模・広がりだったのですか？

原・せいぜい千～万単位で、他国の「アラブの春」のようなものと比較すれば少ないですね。なおかつ、デモの怒りのぶつけ先は、中央政府よりもバスラやクルド地区では地方政府に向

※注⑥　アメリカ大使館人質事件：1979年にイラン・イスラム革命が発生。それまで親米路線だったパーレビ国王はエジプトを経由してアメリカに亡命した。それに反発したイスラム法の学生が在イランアメリカ大使館を占拠、外交官などを人質にして国王の引渡しを要求した事件。状況は長引いたが、翌80年7月に元国王が死去したこともあり、81年1月に444日ぶりに人質は解放された。

かっています。

川上・昨年六月にバグダッドに行ったときに、いまだに一日四～五時間しか電気が来ていなくて驚きました。古い目抜き通りの裏に小さい縫製工場などが集まっていますが、「電気を買ってまで工場は動かせない」「中国製品も大量に出てきていて商業的に太刀打ちできない」として全部閉まっていた。スーパーマーケットの商品もトルコやシリア、ヨルダンからの輸入品ばかり。電気が来ないからポンプが動かないので灌漑が機能せず、国内の農業がたちいかないからだそうでした。

湾岸戦争の後でも、九五年頃にはそれでも回復してきていたと記憶していますが、もう戦争からずいぶん経っているのに、今はそれよりもひどい。なぜか、と思ってさまざまに話を聞きました。結局、イラクにはお金になるものが石油しかない。その分け前をいかに自分に持ってくるかだけを考えていて、だれも国全体・国民全体のことを考える人がいない、ということでした。

福田・パレスチナでは本当に苦しい貧困の人たちを救うようなイスラムの自助システムは昔から存在してきましたが、その一部としてもハマスは頑張って来た。それが住民からの支持につながっているのだと思います。

川上・ガザの場合は難民が八割。最低限のところはある意味ではUNRWA※注⑦で支えられて、プラスして本当に困ったらハマスの慈善団体がサポート。もともとパレスチナ自体がイスラム社会なので、家族の中で収入がひとつでもあればみなが支えあって生きていく、そうした二重三重の支えあう仕組みがありますね。逆に自治政府、ファタハの腐敗構造はどうしようもないな、と思える。

福田・パレスチナ人の生活が一向に良くならない一方で、自治政府の議長府はすごい豪華で、噴水もあって。狭い地域ですから、その腐敗ぶりは子どもたちまでみんなが知っている。

谷山・その身内への怒りが、イスラエルへの怒りよりも先に爆発しないとも限らないよね。

■ 中東全体を見るために

谷山・もうだいぶ話をしてきましたが、こうした国境を超えた様々な波及効果がありうる以上、JVCとしてもどこかに拠点を置いて見ていかなければならないかな？

福田・本当にそう思います。個別の国でその国の中の活動だけを見ていると、中東全体の動きがまったく見えなくなってしまうように思います。ましてやパレスチナ難民は外に三百万人近くもいるのに。

川上・いまならヨルダンから見てみるのはどうでしょうか。「アラブの春」に関連づけて言えば、他国と同様にヨルダンでも若者の不満は相当たまっているようですし。

そして、ヨルダンにはGCC※注⑧加盟問題がありますね。GCCの現加盟国はすべて王家や首長家であって、ヨルダンもハーシム王家です。その意味では、ほかの湾岸の王家・首長国は、ヨルダンには革命（民主化）は起こってほしくない・シリアまでで止めたい、と思っているでしょうね。単なる世俗的な独裁制の国は、エジプトにしろチュニジアにしろリビアにしろシリアにしろ、今回の「アラブの春」で体制は維持できなかった。ただし首長家・王家は別だ、とGCCの湾岸諸国はしたいところでしょうから。その意味では、ヨルダンは試金石と言えるのではないでしょうか。

谷山・なるほど、もしそこが揺らぐとなると、湾岸諸国にしろアメリカにしろ相当介入してくるかもしれない。今後の状況を見る上でも興味深い指摘です。

■ 若者の成功体験を後押し

福田・川上さんのお話の中で、若者が政治プロセスに関われない、生活や体制に不満があってもどう動けるかわからないという内容がありましたが、そうした中で、私たちNGOは現場で何ができるのでしょうか。

川上・「民主化」というのは、若者が発言権を平和的に発揮する場だと思う。そういう意味で民主化を進めていくのは大切だと思います。

谷山・もとからある秩序の上に新しいものを築かない限り、外からの軍事的な介入も含めて、民主主義は植えつけるのは本当に難しい。イラクでもアフガニスタンでも経験しているわけですよね。とは言いながら、もとからある秩序がディスカッションを排除した権威主義的なものであったりするのであれば、そこに外からどう関われるのか。

川上・たとえば、ある種のイベントや文化行事をする際に、若者が主導する形でしてもらうというのは面白いんじゃないですか？ しかも、それだけに終わらないような。

原・イラクのNGOの人が、「イラクにはいまだにバーシスト（バース党党員）がいっぱいいる」と言っていました。これは、文字通りのことではなくて、そうしたメンタリティのことを言っているんですね。権威主義的なもの、上から言われたものに付き従う、自分の考えはない、という意識。それを変えないと次の世代の未来はない、と。

川上・エジプトでも、今後を考える上で、若者が主役になって物事を動かせる経験を積んでいく場が、政治でなくても必要なのかもしれません。多分エジプトでは、タハリール広場でのことが若者が自分たちで初めて声をあげた動きなんですよね。広場でペインティングをしたり、テーブルを作って好きなスローガンを書いたり。あれで「自分たちでも発意できるんだ」という体験ができた。それを、もう少し社会レベル・文化レベルで主導できる経験を積んでいければ、それは民主化の動きにつながっていくのでは。いまは雰囲気が自由になっていますし、革命を実行したと言う意味でも、若者たちは自信をつけていますしね。

谷山・なるほど、今後考えていきたいですね。今日は長い時間ありがとうございました。

※注⑦ UNRWA：国際連合パレスチナ難民救済事業機関。パレスチナ自治区の住民および周辺国のパレスチナ難民に対して援助や開発を実施するもので、国連総会の補助機関。

※注⑧ GCC：湾岸協力会議。加盟国間で経済・金融・貿易など各分野で協力し合う仕組み。域内での共通通貨の導入も計画中。現在、湾岸地域の６ヵ国が加盟。

リオ＋ 20 サミットで見えた小さな希望

サミットにおける成果文書の詳細などについては、グリーンエコノミーフォーラムのウェブサイトが参考になります。
→ http://geforum.net/

地球的課題への挑戦を高らかに掲げた 92 年の「地球サミット」から 20 年。「国連持続可能な開発会議」（通称リオ＋ 20 サミット）が今年 6 月にブラジルのリオデジャネイロで開催された。これに日本政府代表団の顧問メンバーとして参加された JVC 理事の古沢広祐氏に第 55 回 JVC 理事会（9 月 14 日）において報告していただいた内容を中心に、今回のサミットの背景や成果、市民参加のあり方についてとりまとめた。（採録・構成：編集部）

■二十年前とは違った

二十年前の「地球サミット」では、開発・発展と環境保全との矛盾の克服がテーマとされた。東西冷戦の終結を受けて南北問題に人々の関心が向かったという時代的背景もあって、百七十ヵ国から約四万人が参加し、地球市民社会が人類共通の問題に取り組む新しい時代を迎える期待と高揚感があった。

あれから二十年。今回参加してみて、時代の変化を大きく感じた。今回のサミットはブラジル政府が声をかけて国連と協働したものであり、環境保全と持続可能な開発・発展とをもう一度結びつける機会となりうるものだった。しかし、先進国は折からの財政危機・金融破綻に苦しみ、新興国（ブラジル・中国・インドなど）は環境問題よりも従来型の経済発展を優先しがちであるなかで、往時の気運からは大きく後退していると実感させられた。

■ＭＤＧｓからＳＤＧｓへ

今回のサミットには大きく二つのテーマがあった。「持続可能な開発と貧困撲滅につながるグリーン・エコノミー」と「持続可能な開発のための国際的制度枠組み」である。前者については、先進国側・途上国側での思惑のズレが最後まで埋まらなかったが、後者に関しては今回のサミットにおいて新しい方向性が提示された。

二十年前の「地球サミット」においても持続可能な開発については言及されていたが、成果としてできたものは、気候変動枠組み条約と生物多様性条約という二つの環境条約のみで、開発面の取り組みは弱かったことはいなめない。その後二〇〇〇年に入ってから、ＭＤＧｓ（ミレニアム開発目標）という開発に関する柱ができた。しかしその後、この両者は別々の推進プロセスをとってきた。

今回ＭＤＧｓの期限が二〇一五年に迫るなかで、ＭＤＧｓ以降、開発だけではなく環境面や社会面まで目標の枠を広げて、ＳＤＧｓ（Sustainable Development Goals・持続可能な開発目標）に組み替えて結びつけることが合意された。しかも、このＳＤＧｓを提起しリードしたのが先進国でも新興国でもなく、コロンビアやグァテマラといった周辺的な途上国であったことは注目に値するだろう。

これを推進するグループ（ハイレベル・パネル、日本からは菅直人元首相が参加）もすでに設置されており、サミットの場でもジェフリー・サックスやムハマド・ユヌスのような有名人がＳＤＧｓをアピールしていた。ＳＤＧｓでは先進国自体もどう変われるのか、南北共通の目標にどう取り組めるかが重要になる、ＳＤＧｓこそが環境と開発について教育レベルや市民への呼びかけの有効なツールとなるのだからがんばろう、と呼びかけていた。ＭＤＧｓが途上国の状況改善のために何をすべきかという開発面がメインだったが、ＳＤＧｓでは環境問題や持続可能な生産と商品など、その他の視点も入ってくることから、言ってみれば開発の「中身」までが問われることになる。

このＳＤＧｓが今後どのようになっていくかはまだ未知数だが、開発アジェンダと環境アジェンダを結びつける土俵をつくる方向性はひとまず定まったと言える。

■市民参加はすすんだが

今回のサミットでは、一年ほど前から「リオ＋２０国内準備委員会」が設置され、九つのメジャー・グループ（女性、子ども・若者、先住民、ＮＧＯ、地方自治体、労働者・労働組合、産業・経済界、科学・技術者、農民）からそれぞれ市民代表が参加し、事前の準備段階からサミットに関わることができた。私はそのうちのＮＧＯ代表として委員となり、またサミット本会議にも政府代表団の顧問として参加した。「地球サミット」の時に政府と市民との間に大きな溝があったことを考えれば、大きな変化と言える。しかし、これが実際に有効に機能したかどうかはこれから見ていかなければならない。

また、サミットにおける日本のプレゼンスはとても弱かった。玄葉外務大臣は参加していたが、「防災」「環境未来都市」といったことを言っているだけ。準備の段階から、「人間の安全保障」分野について「持続可能な人間の安全保障」として日本が介入してはどうかと提言していたのだが、政府の反応は弱かった。環境技術を諸外国に売っていくことは考えているが、将来に対するビジョンについては語らない。ここは引き続きＮＧＯがプッシュしていかなければならない分野だと思う。

二〇一五年以降の世界の新しい枠組みと対してどう関わっていくのか、市民社会やＮＧＯとしても意識しながら活動していく必要があるだろう。

連続講座「お酒から学ぶ世界」

～ 人と社会を映しだすお酒 ～

【日時】2012 年 8 月 31 日～ 9 月 26 日（全 5 回）
【場所】JVC 東京事務所

お酒の試飲を交えながら進める、大人限定の連続講座「お酒から学ぶ世界」を全五回で開催しました。毎回定員の二十名を超える申し込みがありました。

宗教や政治状況に関わらず、世界中どの地域でも地元に根付いたお酒とそれにまつわるエピソードがあるもの。アジア、中東、アフリカと活動地を大きく横断しての開催となりました。

年齢や宗教による「飲む自由」に関心が行きがちなお酒ですが、講座を通じて印象的に伝えられたのは「お酒を作る自由」の重みでした。日本でも、日清戦争と日露戦争の戦費確保の必要性から税収を増やすために酒造りが企業の独占産業とされて、農家のどぶろく作りが禁止された経緯があります。

政治や戦争といった時代の力に影響されることも少なくない中でも、イスラエルの占領下で土地を守り、ワインを作り続けるパレスチナの人々や、団結して運動を起こし、酒作りの権利を取り戻したタイの農村の人々がいます。「自分たちが決定権を持って生産から消費まで関わりたい」。タイの農民の言葉は、お酒だけでなく、これからの社会のあり方へのメッセージではないでしょうか。

第 4 回：パレスチナ
実はビールもワインも作ってます。パレスチナのたくましい人たち

パレスチナの人々の大半はお酒を飲んではいけないイスラム教徒ですが、お酒をたしなむ人も珍しくない。キリスト教の聖地を擁するパレスチナにはキリスト教徒も暮らしており、お酒を作る文化が昔から存在した。丁寧にワインを作り続けている修道院は海外にも知られ、「中東一の美味」と豪語するビール工場では、毎年村人総出でオクトーバーフェスト（ビール祭り）を開催している。

今日飲んだお酒：
①クレミザンワイン
②タイベビール（写真）

①クレミザン修道院で作られているワイン。分離壁建設の影響で売上が激減。
② 93 年のオスロ合意の後、平和を期待して建てられた醸造所で作られたパレスチナ初のビール。

第 1 回：イラク
イラクで飲む自由・飲まない自由 ～飲酒事情から見る多様性～

イラクには世界最古のメソポタミア文明にさかのぼる歴史がある。麦の耕作も古来から行なわれ、酵母と麦でパンが作られることから醸造技術もあった。宗教の戒律が厳しいと言われる中でもイスラム教徒で飲む人がいればキリスト教徒でも飲まない者もいて、飲酒を楽しむ選択の自由はあった。宗派主義が強まり、飲酒の規制が厳しくなったのはイラク戦争後のこと。

今日飲んだお酒：
蒸留酒「アラク」

イラク隣国の 2 カ国のものを用意。葡萄酒を蒸留してアニスの香りを付けたヨルダンの「Arak Haddad」（写真）と、トルコの「Yeni Raki」。

第 5 回：ラオス
ジョニ青って知ってます？ ジョニーウォーカーのランクアップから見える、ラオスの格差社会

森林からの自然資源に恵まれた伝統的な暮らしを送ってきたラオスの村人。格差も少ないと考えられていた。そんなラオスにも急激な経済開発の波が押し寄せ、都市部では高級ウィスキーの栓を次々と開ける富裕層も生まれた。経済発展に血道を上げるあまり、その歪みが村の暮らしにしわ寄せとなって現れている。

今日飲んだお酒：
①米焼酎「チャンパカオ」（写真）
②ビール「ビアラオ」

①ラオスの国の花、チャンパをラベルにあしらった度数 40 度の米焼酎。
②元国営企業ラオブリューアリーによるラオスで圧倒的なシェアを誇るブランド。

第 2 回：南アフリカ
ワインから見える、南アフリカの歴史といま

ワイン産業発展の陰には黒人という安価な労働力があった。アパルトヘイト下のワイン農場では、賃金の代わりに質の悪いワインを支給して働かせていたという報告も。94 年の民主化後に状況は好転。南アワインのフェアトレード認証は、労働者の人権侵害に対する欧米の消費者の批判から生まれた。「いい消費者」が、南アワインの新しい歴史をつくる。

今日飲んだお酒：
赤ワイン「THANDI」

03 年に世界で初めてフェアトレード認証を受けたワインブランド。南ア最大の黒人経営ワイン企業。「THANDI」はコサ語で「愛をはぐくむ」という意味。

■参加者の感想

「悲壮感あふれる生活、歴史、貧困。そうした話ばかりかと身構えていましたが、明るく興味のわく話題が多くて楽しめました」（南アフリカの回）

「パレスチナの印象が百八十度変わりました」「お酒という思いもよらない切り口から、海外の現状を知れてよかったです」（パレスチナの回）

「なじみがない国でしたが、仏教が日常生活に深く入っていることや、単一作物による土地の疲弊など、興味深く聞きました」（ラオスの回）

第 3 回：タイ
農民の『どぶろく』から見えるタイの農村

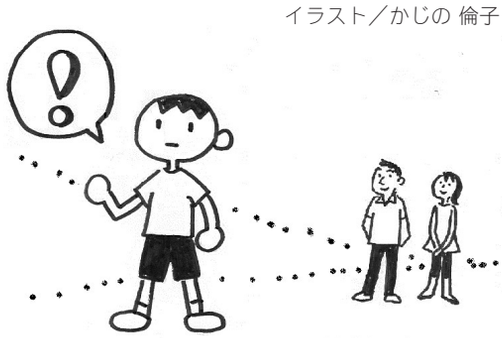
タイでは昔から農民が家庭でお酒を作ってきた。しかしそれは約 60 年前に定められた酒税法により禁じられ、酒造は企業の独占となってしまった。そんな中で、「自分たちが決定権を持って生産から消費まで関わりたい」という思いから農民たちが運動を起こし、どぶろくを作る地域の知恵や技術、そして権利を取り戻した。

今日飲んだお酒：
①タイの蒸留酒「モンシャム」
②島根県弥栄町のどぶろく「弥盛（いやしろ）」（写真）

①泡盛のルーツとなったタイ焼酎。
②タイの若手農民交流で関係のある弥栄町でつくられたお酒。

スタッフのひとりごと

イラスト／かじの 倫子



ある大雨の日の出来事

気仙沼事業 現地統括　山崎 哲（さとる）

この８月に結婚をした。同時に７歳の男の子の父親となった。９月のある日、東京で働く妻と息子が私を訪ねて初めて気仙沼へやってきた。大雨の日曜日のほんの数時間ではあったが、今も残る大震災の爪痕の一部を車で見せて回った。

仮設商店街で遅めの昼食をとり、建物の基礎ばかりが残された平坦な市街地跡を抜け、その平野に不自然に座している大型漁船の前を通過し、校庭に建てられた仮設住宅団地を垣間見るなどした。

これらの光景が息子の目にはどう映ったのだろうか。それとなくたずねてはみたが明確な返答はなかった。何か言いたそうではあったが。

◎

「募金はしないといけないんだよ！」翌朝の食卓で祖父母に対しこう語ったそうである。気仙沼で見聞きした事を伝える中で、自分にできることを考え見出した答えであるようだ。「家族が一緒にいられるのは奇跡なんだよ！」こんな大人びたことも語ったそうだ。

これらの事を電話越しに伝える妻は「自分が持ってる物とか、食べ物とか、自分の周りにある物や人が、自分には十分に足りてるんだってことを、あの子は感じたみたいだよ」と、心なしか嬉しそうに話していた。

◎

彼の言う通り、私が妻と息子にめぐり合えたのはまさに奇跡である。周りの物や人々に恵まれていると感じてもいる。だが、そのありがたさを忘れてはいけない、と、自分に言い聞かせてはいても、子どもが自然に発する一言にはやはり勝てない。

物事を真っ直ぐに見つめ様々なものを感じ取る息子を、そして妻を、私はいつまでも大切にしていく。あの大雨の日の出来事は、私たち３人の絆を一層強いものにしてくれた。

みるよむきく

『がれき処理・除染はこれでよいのか』

熊本 一規、辻 芳徳 著／緑風出版／ 2012 年／ 1,995 円（税込）

今年三月、政府は突然震災がれきの広域処理の方針を表明した。これに対して、受け入れを表明した自治体では住民の反対運動が起きた。ＪＶＣのあるスタッフは被災地の人々の立場から、反対運動は住民のエゴではないかと憤慨していた。またここに被災地とそれ以外の地域の住民の分断が生まれ、ＪＶＣのスタッフまで感情的に巻き込まれることになった。

本書は震災がれきの広域処理に対する分析と批判から筆を起こし、除染の問題と住民帰還の問題へと批判を展開する。そして、「『処理の原則』に反した『がれきの広域処理』が進められているのは『がれき利権』のためであり、避難よりも除染が優先されるのは『除染利権』のためである」と喝破（かっぱ）する。合わせて利権優遇のがれき処理と除染に対する代案を提示している。

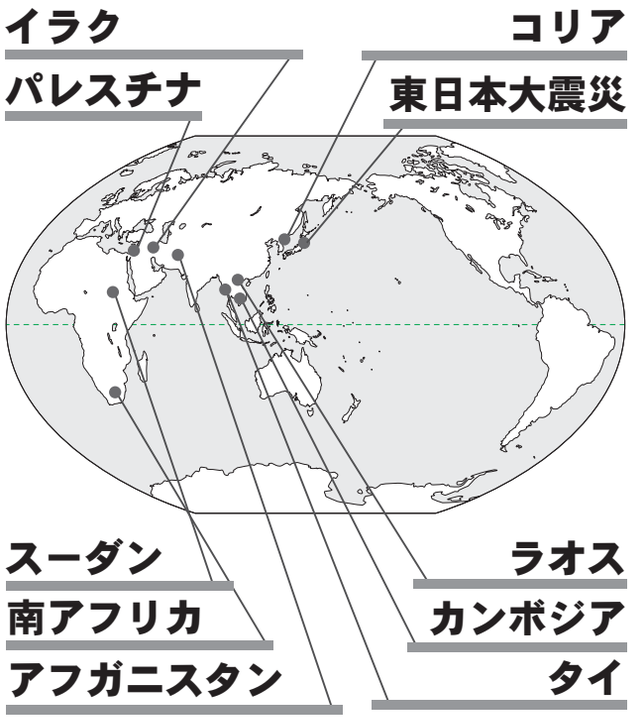
政府は広域処理を可能にするために特措法を制定し、従来百ベクレル／Kgとされていた低レベル放射性廃棄物の基準を八千ベクレル／Kgに変えた。また、産廃が多く含まれている震災がれきをすべて一般廃棄物の扱いにした。これによって、ゼネコンががれき処理を受注できるようになり、かつ本来「集中し隔離」すべき放射性廃棄物を全国に拡散させることが可能になった。また避難指示解除の基準を年間被曝量二十ミリシーベルト（一般国民の年間許容被曝量の二十倍）として帰還推進の拠り所としたのである。

著者の熊本氏は環境経済・環境政策の専門家で、ごみ問題や埋立・ダム・原発問題で一貫して住民をサポートしてきた。熊本県球磨川流域の漁民・住民が川辺川ダム建設計画を中止に追い込み、下流の荒瀬ダムの撤去を実現させた際の立役者である。ここ十年では無敗、約十の公共事業反対で住民を勝利に導いた。

冒頭のように、政府・行政によって市民・住民は分断されるのが常である。私たちは本書によって市民・住民が運動において拠るべき原則と事実、武器とすべき法規はなにかを知るであろう。

（代表理事　谷山 博史）

JVC は、現在 9 の国 / 地域と東日本大震災被災地で活動しています。



南アフリカ

■交流訪問の準備をするボランティアたち。

■ HIV/エイズ(リンポポ州)

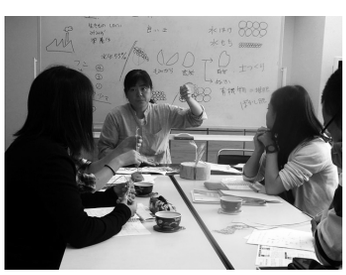
リンポポ州ヴェンベ郡において、今年 4 月から三年間をかけ、HIV/ エイズ予防啓発および HIV/ エイズ陽性者支援強化プロジェクトを実施している。

本プロジェクトの一環として、HIV/ エイズ陽性者を含む疾病を抱える患者を日々一番近くで支える、訪問介護ボランティアたちの能力向上のための研修を提供していく。7 月下旬には、研修の実施を依頼する団体を訪問し、研修内容を調整。8 月下旬には HIV/ エイズ治療の研修を実施する団体が事業地を訪れ、事前説明会と能力検定を行ない、参加者をクラス分けした。

また、8 月には普段 9 つの離れた村々で活動する訪問介護ボランティアたちが、お互いの村を交流訪問。研修を前にして、訪問介護ボランティアとして共通する課題を共有し、今後の研修を通して改善していきたい点などを話し合う機会を設けた。

有機農法による家庭菜園にも着手。10 年に終了したプロジェクトで研修を受け、有機農業の担い手となったアベル・コマネさんを新たな有機農業の担当スタッフとして迎え入れた。9 月前半には、彼を中心に事業地内での家庭菜園の調査を開始した。(冨田)

タイ


■タイに派遣されるインターンの東京研修。アジア学院の大柳さんに話を聞く。

■農村派遣研修

9 月上旬に計画していたスタディツアーは催行人数に達せず中止。タイの農村で学ぶインターンシッププログラムの日本国内研修の調整を行なった。3 名の研修生を迎え、プログラムは 9 月下旬に開始する。

■日・タイ若手農民交流

11 月に日本の若手農民との交流を目的に来日するタイ人若手農家の選考を進め、2 名の研修生が選ばれた。(寺西)

■ビルマ / ミャンマー国内状況の調査

ビルマ / ミャンマー国内での活動の可能性を探るために、9 月下旬からの国内視察の準備をした。すでに活動実施中の日本の NGO を訪問し、NGO 登録を始めとしたビルマ / ミャンマー政府との折衝について情報収集した。(下田)

ラオス

■参加型農村開発研修の修了証を手に記念撮影。

■森林保全／農業・生活改善事業（サワナケート県）

ラオスでは雨季が続き、農業チームは SRI の研修やフォローアップに忙しかった。また、米銀行の米開きが行なわれ、米が貸し出された。洪水に耐性のあるという品種の村人との試験栽培については、今年は大きな洪水がなく成果がわかりづらかったが、村人はその品種自体には満足している様子である。8 月初旬には害虫に詳しい日本の専門家の訪問、サワナケート大学でのやはり害虫駆除のワークショップに参加と、対象村で問題になっている害虫の農薬に頼らない駆除の方法を模索した。1 村でパイロット的な調査も開始した。

森林活動では、他団体とこれまでの経験を共有したり、今後起こりうる問題について学んだりする機会を多く持った。REDD に関するワークショップに参加したり、アジア民衆フォーラム[※注①]の準備会議で植林による森林伐採に関する懸念を表明した。また、植林についての調査も行なった。

また、8 月に参加型農村調査の研修を行なった。政府とのプロジェクト覚書は県農林局の許可が下り、最終段階に入っている。また、8 月末に新駐在員の林を向かえ、9 月に半期会議を開いた。(グレン)

※注① REDD (Reducing Emissions from Deforestation and Forest Degradation in developing countries)：森林減少・劣化からの温室効果ガス排出削減。途上国の森林減少を抑えることで温暖化抑制につなげようという試みだが、その実施方法、手続き、受益者等を巡って議論を呼んでいる。

東日本大震災

■防災集団移転事業の移転予定地を視察する。（気仙沼）

■鹿折地区での復興支援（宮城県気仙沼市）

気仙沼市鹿折地区で復興支援活動を行なっている。震災により住民が離散した地域において、住民間のコミュニケーション不足を解消するため、地域住民が集う交流会を開催。また、生活不活発病予防の活動として仮設住宅で釣りのサークルを設立し、入居者が趣味を通じて活発な生活を取り戻すことを目指している。8月には地域行事への開催協力として、学生ボランティアと共に鹿折地区の学童保育所で夏祭りを開催した。

防災集団移転事業では、住民と行政との橋渡し役となる外部のアドバイザーを現地に派遣。移転予定地を視察し、住民や行政を交えた住民相談会を開催している。東京では、報告会「気仙沼はいま」を月1回開催中。（石原）

■災害FMと仮設住宅サロンの運営支援（福島県南相馬市）

災害FMの聴取エリア改善工事が完了。ラジオの送信アンテナを市西部高倉山の原町中継局にある福島テレビの鉄塔に移設した。標高の高い場所から電波を発信することで、これまで市中央部の原町区でしか番組を聞けなかったが、北部の鹿島区と南部の小高区でも聴取可能となった。

サロン活動では、9月の終わりにスタッフの谷山由子と現地協力団体「つながっぺ南相馬」代表の今野由喜さんが神戸への視察を実施した。現地社協や団体から阪神淡路大震災の時の様々な経験を共有していただいた。（白川）

カンボジア

■聞き取り調査で質問に答える農家たち。

■生態系に配慮した農業による生計改善（CLEAN）

07年からシェムリアップ県東部で活動を実施中。農家の田植え前にSRI研修を引き続き行なった。試験農場では、全スタッフで田植えを行ない、実験的に自然堆肥や液肥・牛糞などによる発育の違いを比較している。来年3月の第二フェーズ終了に向け9月に内部評価を実施し、事前にそのデータ収集のため農家からの聞き取りとディスカッションを行なった。

■環境教育（EE）

09年4月からシェムリアップ県東部の小学校で実施。元JVCスタッフで現在インドでNGO活動を続けているチャタジー氏を講師に、生態系農業やエコロジーに関する概念から実践までを農家や教師約35名がレクチャーを受けた。

■資料・情報センター（TRC）

持続的農業・農村開発・環境に関する資料を94年から提供。7～8月は新規の学生利用者が計12人、貸し出し冊数は計328冊であった。8月のオリエンテーションはArt Theory of Speakingをテーマに話し方や聴き方講座を実施。

■技術学校

85年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を運営。修理工場の車両受注台数は月100台前後で安定しており、企業からの連携申し込みなども前向きに進めているが、近年カンボジアに進出する企業数が増加しているため、事前の情報収集が必須となっている。（若杉）

イラク

■最終発表会ではイスラム教徒もキリスト教徒も一緒。

■地域社会支援

夏休み期間を利用し6月12日より始めた「子どもたちとつくる地域の平和」ワークショップ（通算第5期）は7月18日に最終日を迎え、約150名が参加し最終発表会を行なった。発表会はキルクーク市内のキリスト教会で行なわれ、イスラム教徒の子どもたちは、教会学校に集うキリスト教徒の子どもたちとの交わりを持ち、宗教の違いを超えてお互いに理解を進めて対立を克服するという活動の趣旨を地域の人々に認知してもらう象徴的な出来事になった。

■「子どもたちとつくる地域の平和」ワークショップ評価

09年～11年度の通算4期分のワークショップの評価を実施。子どもたちの家族や隣人など、対面できる範囲内でお互いを理解し対立を緩和しようとする様子が観察されているが、地域内での広がりと持続性の見極めが課題。（原）

スーダン

■支援された種子から育てたオクラを収穫する被災民。

■紛争による避難民・難民への支援

スーダンと南スーダンとの二国間交渉は、石油収入の分配と市民権問題（互いの国で暮らす相手国市民の生活権）について合意がなされた。しかしなお国境周辺の安全保障と係争地の処遇については対立が続いており、両国の緊張は解けていない。

国境線の北側のJVC活動地、南コルドファン州でも9月に新たな軍事衝突が起き、何十万人もが被災民となっている。南スーダン側の難民キャンプには6万人が逃れている。

州内では被災民への支援として5～6月に農作物の種子を配布したが、8月には野菜やトウモロコシが収穫のピークを迎え、食料不足の解消と現金収入の確保に貢献している。9月には果樹の苗木と家畜の支援を開始した。

南スーダン側のイーダ難民キャンプには、今後にむけての調査のために日本人職員2名が入った。（今井・佐伯）

パレスチナ

■巡回診療で子どもの身長を測る看護士。

■子どもたちの栄養改善支援（ガザ地区）

4 月からガザ市内で実施中の本事業では、引き続き 40 人の母親ボランティアが、家庭訪問を通じた栄養失調予防指導に取り組んでいる。特に出産直後の母親たちには、母乳育児指導や、育児カウンセリングも行ない、乳児の栄養改善にも力を入れている。栄養価の高い食べ物を使った調理指導セッションでは、母親交流の場を設け、地域ぐるみで問題に取り組むよう促している。

■学校保健・健康教育・巡回診療支援（東エルサレム）

イスラエルに占領・併合され、分離壁で分断され、パレスチナ自治政府のサービスも行き届かないエルサレム地域で、学校・地域を対象に巡回医療と衛生・健康教育を実施中。9 月からは、同内容の活動を行ないつつも、日本外務省から資金援助を受け、現地の人たちが自ら健康を守っていける仕組み作りに焦点を当てた 3 ヵ年事業として新たなスタートを切った。現在、物資購入や学校・自治政府との調整に奔走中。

■政策提言

日本政府が作成中のパレスチナ向け「国別援助方針」に対して質問・要望を挙げ、日本大使館からの回答とともにウェブサイトで公開中。「国別援助方針」の作成プロセスがより市民に開かれたものになるよう働きかけている。9 月には、30 の国際 NGO と合同で、カルテット（米・露・ＥＵ・国連）に対し、ヨルダン川西岸地区での家屋破壊・強制移住の激化、およびガザ地区の封鎖継続に対処するよう要請書を提出。（今野・金子）

アフガニスタン

■女性のスタッフも会議に参加する。

■女性と子供の健康改善のための地域保健医療事業

保健アドバイザーの西が、2010 年に導入された家族単位のカルテなど各種記録簿・報告書を分析しながら医療事業の運営状況を確認し、よりよい運用のための助言を行なった。クズ・カシュコート保健委員会メンバーとワークショップを行ない、地域保健の現状把握や今後の方向性について話し合った。また、女性スタッフの積極的な参加を促進するために、新たに組織体制の中に女性部会を設置した。

■教育支援活動

教員対象の健康教育研修をモニタリングするためのチェック項目のリストが完成した。今後、定期的に学校を訪問する際、このリストに沿って学校の衛生状態などをチェックしていく。また、モデル校で実施した「授業研究」の評判が良く、同じ村の他の学校からも強い関心表明があったため、担当スタッフが校長と話し合いを持った。今後他校での実施を検討し、地域全体の教員の指導能力の向上を目指していく。

■政策提言

現地 NGO への事業助成を通じて、復興における市民社会の主体的な関わりを高めるという「アフガニスタン市民社会サポートファンド」の実施に向けて、現地の NGO ネットワーク「ACBAR」（アフガニスタン救援団体調整機関）や日本政府との会合や連絡などを行った。また、日本人スタッフの現地出張の際に東部 ACBAR 執行委員会のメンバーと現地で会合を持ち、7 月のアフガニスタン復興東京会合の振り返りとフォローアップを行なった。（加藤）

コリア

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

◎平壌訪問

今年も 8 月下旬に平壌（ピョンヤン）市ルンラ小学校とチャンギョン小学校で、8 月下旬に交流ワークショップを開催した。日本人の子ども 2 名と東京・神奈川の朝鮮学校に通う 9 名が訪朝し、絵画作品「ともだち名人キャラクター」づくりに取り組んだ。「ともだちを増やし、幸せにする方法を考える」というテーマについて初対面の子どもたち同士が話し合い、キャラクターの能力を決めるもの。「下書きを 10 回以上した」「なかなか案を取り入れてもらえなかった」「言葉が通じなくても、通訳の人を介して意見交換ができた」など試行錯誤を重ねながら、まさに共同・協力しての作品を完成させた。ルンラ小学校では、できあがったキャラクターを他の子どもたちに紹介する発表会も開催した。

今回の訪問には大学生 7 名が同行。子どもたちのレクリエーションの場で進行役をつとめた。また、大学生として平壌外国語大学の日本語学科を訪問し、同世代の若者との交流企画を実現した。『ともだち展』の平壌訪問は絵画展の枠を越えて、小学生にとどまらず大学生層にも相互理解の場を広げつつある。（寺西）

■「ポーズはどうする？」アイデアを出しあって作品の構想をまとめていく。

■平壌で完成した作品。国交のない国同士でも自由に行き来できるような、虹をかける力を持っているキャラクター。

映画祭紹介

国際有機農業映画祭

今年で六回目を数える国際有機農業映画祭は十二月十六日（日・九時三〇分開場）、東京都内の法政大学市ヶ谷キャンパス内の外濠校舎で開催される。今回のテーマは、「こんな世の中、ひっくり返さなあきまへん」。

二〇一一年三月十一日のあと、世の中の価値観はひっくり返ったと思いきや、原発再稼働、ＴＰＰ推進、果ては憲法九条改悪を公然と掲げ、次期首相の本目とされる自民党総裁が誕生。そんな状況に一石投じたいという思いがある。今回の映画祭の趣旨を次のように書いた。「ゆるゆると土をつくり、虫たちと付き合い、雑草に価値を見出し、そんな有機農業のいとなみにこそ、この混沌とした時代の変革する鍵があると考えたからです。〝ゆるゆる革命〟をワクワクと楽しみながら一緒に歩き出しましょう。」

二会場に分かれ、十二作品を上映する。福島の村、水俣、ベトナムの枯葉剤、と人間が引き起こした取り返すのつかない厄災の実相を伝えるドキュメンタリー、種や土を守り育てる映像、雑草の美しさを表現したカメラの目、などなど自然と人間、その両者をつなぐ農の営みを見事に表現した映像群が紹介される。

また、午後三時四〇分からはテーマにそったシンポジウムを有機農業者や学者、ジャーナリストをパネリストに迎え開催する。詳細は公式ウェブサイトを参照してください。

（農業ジャーナリスト／映画祭運営委員会代表　大野 和興）

国内ひろば

JVC network

とどけ歌声 東北へ世界へ ――
JVC 国際協力コンサート開催いたします。

皆さんは、「満席」のコンサートに行かれたことはありますか？「満席」は、その来場者からの熱い思いが波動となって、演奏者の精神面を盛り上げ、よい演奏につなげていく力があるそうです。コンサートは「演奏者と来場者でつくるもの」ということです。もちろん収益面の効果も。昨年はチケット販売、特に東京公演は大変厳しい結果になりました。今年はぜひ皆さまのご協力をいただき、来場者、出演者ともに満足できる公演にしたいと思っています。この T&E を読んでくださる方がお一人 1 枚ご購入いただくと、もうそれだけで大阪、東京会場は満席になります。 一緒にこのコンサートをつくってください。

指揮者はバーナビー・スミス氏（英国）。管弦楽はテレマン室内オーケストラ、合唱はコードリベット・コール（大阪）、JVC 合唱団（東京）です。ロンドンオリンピックで盛り上がった今年の締めは英国よりお招きするソリストたちの美しいキャロルで。皆様のご来場をお待ちしております。(コンサート事務局　石川 朋子)

■ 2011 年東京公演で歌う JVC 合唱団員。

【公演情報】

第 19 回大阪公演

日時：2012 年 12 月 8 日（土）15 時開演
会場：いずみホール
演目：J.S. バッハ『クリスマス・オラトリオ』
（第Ⅰ～Ⅳ部、第Ⅵ部 54 番、63 番、64 番）

第 24 回東京公演

日時：2012 年 12 月 15 日（土）15 時開演
会場：昭和女子大学人見記念講堂
演目：G.F. ヘンデル『メサイア』（英語・全曲）

※チケットのご購入は、JVC コンサート事務局までお問い合わせください。
※東京、大阪公演では当日ボランティアを募集しています。詳細は JVC ホームページ、事務局までお問合せください。
JVC コンサート事務局　TEL：03-3836-4108 E-mail：concert@ngo-jvc.net

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金（郵便振替）

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC 東京事務所

7 月計　560,106 円
8 月計　519,674 円

	7 月	8 月
無指定	58,572 円	13,000 円
タイ	30,000 円	0 円
カンボジア	42,500 円	9,471 円
ラオス	41,000 円	5,000 円
南アフリカ	38,000 円	0 円
パレスチナ	122,000 円	448,203 円
アフガニスタン	23,500 円	9,000 円
コリア	15,000 円	0 円
イラク	17,500 円	0 円
スーダン	49,000 円	26,000 円
東日本大震災	123,034 円	9,000 円

※上表には「夏 / 冬の募金」は算入していません。

②犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

7 月計　89,680 円 / 11 件
8 月計　39,946 円 / 5 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としできる手軽な募金方法です。

7 月計　2,206,250 円 /1,888 件
8 月計　2,280,750 円 /1,929 件

編集後記

たまには編集後記っぽいことを。今回の特集は難産でした。手持ちのネタは座談会を文字起こしした３万字の生原稿と川上氏提供の写真のみ。どうすれば「中東」の複雑さを省かずにわかりやすくできるのか。国境や資源分布、各種事件や対立軸を年代別に重ねられて自由に拡大縮小できる地図があればいいのにと思いつつ、誌面の限界に挑戦しました。…ウソですすみません。(H)

新スタッフ紹介

金子（かねこ） 由佳（ゆか）

パレスチナ現地調整員

六月よりパレスチナ事業現地調整員となりました金子と申します。昨年、ボランティアとしてパレスチナ現地ＮＧＯに関わって以来、パレスチナでできる仕事を探してきました。そのような中、長年現地で事業を行なってきたＪＶＣのメンバーに加われたのは、本当にありがたいことでした。

パレスチナの人々は、占領という苦境にくじけず、しなやかに力強く生きています。そんな人びとと連帯して、私も元気に活動を続けていきたいと思っています。現地ではガザ事業を担当していますが、ガザの人びと、ヨルダン西岸の人びとを問わず交流を深め、みなさんにもたくさんのニュースをお届けしたいと思っています。

林（はやし） 真理子（まりこ）

ラオス現地調整員

名前をみて「おっ」と思われる方も多いかと思いますが、かの小説家とは別人です。以前はアフリカを支援するアドボカシー系ＮＧＯで働き、その後開発援助の仕事を三年半ほどかじり、満を持して（!?）ＪＶＣに参加することになりました。

ラオスに赴任して約一ヵ月。ラオ語がまだ話せないので苦労はありますが、人びとは優しく、食べ物も美味しい（種類が少なく飽きますが）ので生活面は難なくクリア。仕事においては、業務に追われ頭はフル回転、むしろパンク寸前！なんですが、メコン川に沈むきれいな夕日を眺めながら、美味しいラオ・コーヒーを飲むと「うん、やっていけそう…」と背中を押されます。

鉱山開発や産業植林を行なう海外企業進出の影響を受け、活動地サワナケート県の人びとは土地収用や生態系の変化による食料の減少など、多くの問題に直面しています。自分たちで生活を守り、生活を良くしていけるよう、現地スタッフと共に頑張ります。

2012 年「夏の募金」に ご協力ありがとうございました！

2012 年「夏の募金」集計（無指定／郵便振替分：6 月～ 9 月末）

987 件　7,728,216 円

・活動国を指定された募金は上記に含まれません。
・上記夏募金の金額は、ページ左上の JVC 募金の欄には含まれていません。
・募金額の 20%を管理費とさせていただいています。

JVC ウェブサイト 会員専用パスワード（2012 年 11 月～ 12 月）：
ARjX99bPbn

JVC ウェブサイトから T&E のバックナンバーをダウンロードするときに必要です。

Trial & Error（試行錯誤）二百九十八号　二〇一二年十月二十日発行（通巻二百九十八号・隔月二十日発行）
発行人＝谷山 博史
編集人＝大野 和興・長谷部 貴俊
編集スタッフ＝細野 純也
発行＝日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒一一〇-八六〇五　東京都台東区上野五-三-四　クリエイティブ One 秋葉原ビル六階
電話（〇三）三八三四-一三八八　FAX（〇三）三八三五-〇五一九
印刷＝ベスト・プリンティング
定価＝五〇〇円（税込）

好評発売中

壁掛カレンダー	1,500円
卓上カレンダー	1,200円
ポストカード（6 枚組）	500円
スマイル年賀状（10 枚組）	500円

ＪＶＣ国際協力カレンダー２０１３

『大地にうたう』

写真：長倉 洋海

2013 年カレンダーは写真家の長倉洋海氏のご協力を得て制作しました。子どもたちの表情と共に、土の匂い、大地の広がり、吹き抜ける風、潮の香り、森の鼓動を感じ取れるカレンダーに仕上がりました。収益は、アジア・アフリカ・中東での協力活動のほか、気仙沼と南相馬での被災地支援活動に役立てさせていただきます。

JVC Japan International Volunteer Center

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980 年 2 月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVC の活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志で JVC に参加し、活動を継続してきました。JVC はボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVC の方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年 6 回この会報誌と年次報告書をお届けします。

◎一般会員　10,000 円
◎学生会員　5,000 円
◎団体会員　30,000 円
※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方の住所変更などは会員担当の寺西へ。　→ s-tera@ngo-jvc.net

会員数（10 月 1 日現在）　合計 1,188 名
（正会員 583 名、賛助会員 605 名）

■オリエンテーション（説明会）にお越しください。

JVC の活動内容をご紹介しています。お気軽にご参加ください。
会場は JVC 東京事務所、参加費は無料、予約不要です。
◎第 1 月曜日午後 7：00 － 8：30
◎第 2・第 4 土曜日午後 2：00 － 3：30

■ E-mail
info@ngo-jvc.net

■ウェブサイト
http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」（古紙 90%、間伐材パルプ 10%）で作成しました。